Developing a new friendship scale for adolescents : “not to be hurt by friends” and “not to hurt friends”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30410

現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成
－ 傷つけ合うことを回避する傾向を中心として －

岡田　努†

†金沢大学人間科学系　〒920-1192　金沢市角間町

E-mail: †tokada@staff.kanazawa-u.ac.jp

要旨

本研究は，青年の友人関係に関して，友人から傷つけられることを回避する傾向及び友人を傷つけることを回避する傾向に特化した尺度（傷つけ合い回避尺度）を作成し，その信頼性と妥当性を検討したものである．

234 名の高校生と 227 名の大学生に対して，友人関係，配慮・熟慮，被受容感，被拒絶感，自尊感情に関する各尺度についての質問紙調査が実施された．その結果，友人関係については，新たに作成された 36 項目の尺度項目から「傷つけられ回避」「距離確保」「礼儀」「傷つけ回避」と命名しうる 4 因子が得られ，高い内的一貫性が認められた．また「配慮・熟慮」との間で関連する下位尺度に高い相関が見られたことから併存的妥当性も確認された．さらに構成概念妥当性の確認のため，先行研究（岡田,2011）と同様のモデルでの共分散構造分析を行った結果，十分な適合度が得られ，岡田（2011）と同様に，「友人から傷つけられることを回避する」ことが，「友人から傷つけることを回避する心性」を経て，「被拒絶感」を抑制し，結果的に自尊感情を維持させる構造が示された．

キーワード： 心理学，青年期，友人関係，自尊感情

1.　問題と目的

青年期の友人関係は，相互に共感や内面を開示するような関わりを持つことを特徴とし（西平,1973），その関係を通して社会的スキルを学習したり，不安な感情を緩和，解消したり，自己認知のモデルとして機能する（松井,1990）など重要な機能を持つと考えられてきた．

一方，現代の青年の友人関係は，しだいに断片化し，希薄なものになってきているとしばしば論じられている．佐山（1985）は中学生，高校生において，「ウケるようなことをよくする」「一人の友と特別親しくするよりはグループ全体で仲良くする」「相手に甘えすぎ

ないようにする」などへの反応が高いことから，円滑で楽しい友人関係を求めながらも，関係が深まることは拒絶するといった傾向を指摘している．また千石（1985）や栗原（1996）なども，現代の青年は，自分自身や他者を傷つけることを恐れ，表面的な関係にとどまる傾向を指摘している．一方，古市（2011）は，1990 年代以降において，友人や仲間の存在感が増し，そうした仲間との小さな世界の中で幸福感を感じるようになっていると指摘している．土井（2004）は，現代の青年は，対立の顕在化を恐れるために，親密な関係であるほど，自分の本当の姿を示さず，相手を傷つけないように細かい配慮を強迫的に行うとしている．そして，相手の感情を敏感に察知しながら，関係をスムーズに維持することにエネルギーを使い果たしてしまうとしている．このように，対立の回避を最優先にして衝突を避けるような対人関係のあり方を，土井（2008）は「優しい関係」と称している．以上のように，現代の青年にとって，友人の意義や友人からの評価は大きな意味を持つ一方で，それゆえにその評価によって自己が傷つきダメージを受けないよう，距離を持った関わり方をすると考えることができる．

岡田（2010）は，こうした現代青年の友人関係のあり方について，実証的研究に基づいて以下のように分類した。1） 群れて表面的に楽しい関係を維持する青年群，2） 対人関係を回避する青年群，3） 内面的対人関係を維持する従来の青年観に近似した青年群である．群れて表面的に楽しい関係を維持する青年群は，表面的な関係の中での適応がはかれる一方で，他者からの評価に敏感で，安定した自尊感情を持ち得ないなどの問題が示唆された．対人関係を回避する青年群は，自尊感情が低く，全般に不適応傾向が見られた．このように現代の青年の友人関係のあり方は，青年自身の自尊感情の維持と関わりがあると考えられる．

Leary,Tambor,Terdal,& Downs（1995）は，自尊感情を，対人関係において自分が排除されているか受け入れられているかについての指標（ソシオメータ）であるとしている．すなわち，個人は，周囲の他者からのフィードバックに基づいて，自己のあり方の適切性・妥当性を知り，それによって自尊感情が喚起される．所属集団との間で良好な関係を結ぶためには，その集団において適切な特性を持った人間であると思われるように自己を語り，振舞うことが必要である．そのように振舞うことができる個人は，集団に適応的であり高い自尊感情を持っているとしている．

岡田（2007）は，現代青年の友人関係の特徴に関する尺度（友人関係尺度）と自尊感情との関連について大学生に対する調査を行った．その結果，調査対象者は，友人関係において，傷つけ合わないように気を遣いながら円滑な関係を築こうとする群，内面的な開示

を伴う関係を求め傷つけ合うことを回避しない群，友人関係から距離を置く群に分類された．友人関係のあり方と自尊感情の得点との関係から，「傷つけ合わないように気を遣いながら円滑な関係を築こうとする群」は，自他を傷つけないように警戒することで他者から肯定的評価を受ける関係を維持することで自尊感情の低下を防いでいこと，「内面的な開示を伴う関係を求め傷つけ合うことを回避しない群」は，友人に対する警戒心が低いために友人からの受容感を得ることができ，その現れ（ソシオメータ）として高い自尊感情を維持していること，また「友人関係から距離を置く群」は，周囲から排除される懸念から友人関係を回避しており自尊感情の水準も低いことなどが考察された．さらに岡田（2011）では，こうした過程について共分散構造モデルを構成し検証した．その結果，友人から心理的に傷つけられることを回避する傾向が，友人を傷つけることの回避を促し，これが青年自身の被拒絶感の低下と被受容感の高揚を促し，それによって自尊感情が維持・高揚されること，一方，友人から傷つけられることを回避しても，直接には被拒絶感を低減しないことなどが見出された．しかし岡田（2007; 2011）で用いられた「友人関係尺度」は友人関係全体の現代的特徴を測る目的で作成されたものであるため，傷つけ合うことを避ける傾向に関する尺度の項目数が少なく，十分網羅された内容ではない可能性や他の下位分類が見いだされる可能性が考えられる．自尊感情等の他の変数との関連において安定的な結果を得るためにも，より頑健な尺度が得られていることが望ましい．よって，本研究では，傷つけ合うことを避ける傾向そのものに焦点をあてて項目を再度収集することを通して，より頑健な尺度を再構成し，信頼性と妥当性を確認することを目的とする．

2. 予備調査

2.1 方法

親しい同年代の仲の良い友人との間で，お互い心理的に傷つけ合わないようにするため，どのような点に気を使っているかについて，短い文章での記述を求めた．

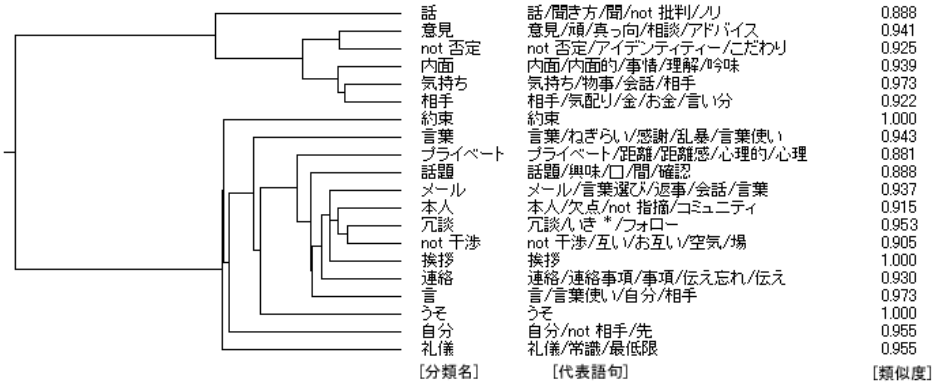
調査対象者　北陸および九州地方の 4 年制大学学部 1〜4 年生および修士課程大学院 1〜2 年生　有効回答者数 122 名．

実施時期　2008 年 6 月〜8 月．

調査は授業時間内に実施した．回答に際しては，無記名調査であること，研究の趣旨および回答への任意性について説明した上で，調査に協力できる場合にのみ回答を願った．

2.2 結果

回答のうち 92 名の記述について，データマイニングソフトウェア 1 を用いて，記述の構造を分析した（なお，本研究では，分析の歪みを防止するため，「友人」と「友だち」など一部の同義語については同一の言葉とみなした）．類似した内容の語句を関連づけてグループ化する主題分類を行いデンドログラムによって表示した（Figure 1）．各カテゴリを表す代表的な内容を「分類名」欄に，カテゴリを構成する主な語句を「代表語句」欄に，また各カテゴリ内での類似度を「類似度」欄に示した．



*「いきすぎた冗談を言わない」を示す

Figure 1 予備調査における自由記述内容の主題分類

ここに見られるように，分類名「話」から「相手」までと，「約束」から「礼儀」までの大きく２つのカテゴリに分類されることが見出された．前者のカテゴリは，相手の話を遮らないように聞くこと，相手の意見や価値観を否定しないようにすること，内面的な話題に気を遣い，相手の気持ちを察するよう，立ち入りすぎないようにするといった内容によるまとまりを形成しており，他者と心理的距離を置き相手に同調する傾向が見出された（他方のカテゴリは，約束や礼儀を守る，嘘をつかないといった一般的な対人スキルに加え，分類不能な語を含め雑多な対人態度が集まったものと考えられる）．このように，雑多な対人態度の中から，他者と距離を置きながら同調する傾向がまとまりをもって認識されている可能性が示唆された．以上の分類を参考に項目を選択し，本調査のための 36 項目を作成した．

3. 本調査２

3.1 方法

調査対象者　北陸地方の高校生　有効回答者数 234 名（男子 67 名，女子 167 名　15～18 歳　平均 16.21 歳）,北陸，東海および首都圏の４年制大学学生　有効回答者数 227 名（男子 103 名，女子 124 名　18～25 歳　平均 20.07 歳）の合計 461 名．

実施時期　2008 年 8 月～2009 年 8 月．

調査は授業時間内および大学見学の折に実施した．回答に際しては，無記名調査であること，研究の趣旨および回答への任意性について説明した上で，調査に協力できる場合にのみ回答を願った．

尺度項目

1)　友人関係で傷つけ合うことを避ける傾向についての尺度（以下「傷つけ合い回避尺度」と略称）．これは予備調査において得られた自由記述回答を元に作成されたものである．

教示文は次の通りであった．「もっとも親しい同性のお友だちを思い浮かべてください。あなたはふだん，その方とどのような付き合い方をしていたり，またその際にどのような感じ方をしていますか？」

2)　併存的妥当性の確認のため，柴橋（2004）のアサーションの心理的要因尺度より「配慮・熟慮」下位尺度 6 項目（「自分の考えを言うときは友だちを傷つけないように注意する」「友だちを困らせるようなことは言いたくない」「友だちの頼みを断るととても申し訳ない気持ちがする」「友だちにいやな思いをさせてまで自分の考えを通したくない」「友だちの気持ちや考えをよく聞いてから自分の考えを言う」「まわりの状況をよく考えてから自分の考えや気持ちを言う」）を同時に実施した．

また，岡田（2011）と同様に自尊感情へ至るモデルを構成することで，構成概念的妥当性を検証するため，以下の尺度項目を実施した．

3)　被受容感・被拒絶感尺度　岡田（2011）と同様に，杉山・坂本（2006）が作成した尺度項目から，被受容感 6 項目（「私は理解されている」「たいてい人は私に快く応えてくれる」「私はたいていの場で認められている」「私はたいてい受け容れられている」「私は人並みには大切にされている」「私は信頼されている」），被拒絶感 4 項目（「私は悪く思われがちだ」「とかく無視されることが多い」「だいたいの人は私につらくあたるだろう」「私は，よく批判される」）を用いた．

4)　自尊感情尺度　Rosenberg（1965），山本・松井・山成（1982）訳のうち「もっと自分自

身を尊敬できるようになりたい」「何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う」を除いた 8 項目を用いた.

2）～4）の教示文は次の通りであった.「あなた自身についてお尋ねします．以下の項目に示されるような内容は，現在のあなたにどの程度あてはまりますか？　」
各項目とも「全くあてはまらない」（１点）～「とてもあてはまる」（５点）の５件法であった.

4.　結果と考察

4.1　傷つけ合い回避尺度の因子分析

傷つけ合い回避尺度 36 項目について，高校生・大学生を合わせたデータを用いて最尤法による探索的因子分析によって 4 因子を抽出しプロマックス回転（κ=4）を行った．パターン行列から単一の因子に.3 以上の因子負荷量を持つ項目を解釈した結果，「友だちからバカにされないように気をつける」など相手から傷つけられたり恥をかくことを避けようとする内容を表す因子（「傷つけられ回避」と命名）9 項目，「自分の内面的なことは話さないようにする」「友だちの内面に踏み込まないようにする」などお互いの内面に立ち入らず距離をとった関わりを表す因子（「距離確保」と命名）7 項目，「自分が悪いと思ったらすぐにあやまる」「友だちの話をきちんと聞くようにする」など礼儀を守り共感的配慮によって相手を気遣う内容からなる因子（「礼儀」と命名）9 項目，「友だちの気分を害するようなことを言わないようにする」「友だちを傷つけないようにする」など相手を感情的に傷つけたり気分を害したりする不安から防衛的に行動を抑制する因子（「傷つけ回避」と命名）8 項目が得られた．適合度は χ^2=912.275（p<.01）で有意であったが，同じデータで確認的因子分析を行ったところ， RMSEA=.066 となりほぼ有効な適合度が得られ，また各観測変数から因子へのパス係数も.3 以上であった．よって，以上 33 項目について，各因子を代表する項目の合成得点をもって下位尺度を構成した．Cronbach の α 係数は「礼儀」「傷つけ回避」が若干低いものの信頼性がほぼ確認された．探索的因子分析の回転後因子負荷量，共通性と固有値，確認的因子分析による標準化推定値，各下位尺度の α 係数を Table　1 に示す.

またアサーションの心理的要因尺度の「配慮・熟慮」下位尺度との相関は，「傷つけられ回避」で r=.411,「距離確保」で r=.198,「礼儀」で r=.664,「傷つけ回避」で r=.569（いずれも　p<.01）であった.「傷つけられ回避」「礼儀」「傷つけ回避」のように，互いに傷つけ合わないよう配慮する対人行動を示す下位尺度との間で高い相関関係を持つことから，本下

Table 1　傷つけ合い回避尺度の探索的因子分析結果（パターン行列）と確認的因子分析

因子	1	2	3	4	共通性	確認的
項目/アルファ係数	.825	.825	.732	.758	（抽出後）	因子分析
下位尺度名	傷つけられ回避	距離確保	礼儀	傷つけ回避		標準化係数
28 友だちからバカにされないように気をつける	.782	.121	.019	-.167	.588	.720
19 友だちの前で恥をかかないように気をつける	.740	.068	-.056	-.089	.520	.683
20 友だちから傷つけられないようにふるまう	.666	.084	-.130	.048	.513	.699
15 友だちから「つまらない人」と思われないよう気をつける	.608	-.044	.061	.035	.394	.630
34 友だちからどう見られているか気にする	.573	-.091	-.091	.259	.471	.670
8 友だちから無神経な人間だと思われないよう気をつける	.462	-.060	.242	.186	.465	.594
39 会話の間(ま)があかないように気をつける	.378	.217	-.066	.074	.295	.531
36 メールにはすぐ返信をするようにする	.330	.001	.213	-.100	.141	.318
33 共通の話題をさがすようにする	.308	-.017	.028	.230	.228	.458
13 自分の内面的なことは話さないようにする	-.003	.858	.176	-.095	.690	.806
26 自分のプライベートなことには踏み込まれないようにする	.116	.828	.097	-.200	.697	.824
38 自分の内面に踏み込まれないように気をつける	.201	.726	.007	-.112	.640	.804
32 友だちと適度な距離を置くようにする	-.117	.507	-.017	.175	.273	.486
7 友だちの内面に踏み込まないようにする	-.031	.488	.064	.240	.345	.518
(37 友だちとホンネで接するようにする)	.086	-.458	.373	-.175	.366	除外
11 あたりさわりのない会話ですませる	.170	.395	-.097	.148	.317	.535
25 真剣な話を真面目に話さないようにする	.042	.381	-.257	.177	.273	.449
31 自分が悪いと思ったらすぐにあやまる	-.069	-.041	.615	-.072	.347	.472
14 友だちの話をきちんと聞くようにする	-.149	-.010	.595	.006	.343	.477
27 友だちの気持ちを察するようにする	.102	-.031	.484	-.057	.241	.480
16 約束をやぶらない	.075	-.051	.483	-.184	.204	.349
10 友だちの気持ちに気をつかう	.127	-.041	.441	.222	.397	.658
18 友だちにやさしくするよう心がける	.148	-.160	.436	.218	.409	.631
23 友だちの話をさえぎらないようにする	-.208	.299	.435	.149	.272	.414
40 場の空気を読んで会話する	.153	.156	.350	.099	.268	.471
4 友だちに心配をかけないように気をつける	.155	.146	.323	.062	.217	.403
(3 友だちに自分の意見を押しつけないよう気をつける)	-.216	.115	.280	.240	.160	除外
2 気に入らないことを言われても怒らないようにする	-.173	.069	-.061	.648	.319	.470
29 友だちの気分を害するようなことを言わないようにする	.116	-.059	.148	.535	.450	.692
42 友だちのいやな面を指摘するときは遠回しな言い方をする	.179	-.075	-.153	.467	.263	.479
1 友だちを傷つけないようにする	.073	-.182	.281	.456	.441	.557
41 友だちの欠点には触れないようにする	.046	.107	.010	.456	.276	.547
30 友だちと意見が対立しないよう気をつける	.214	.134	-.132	.454	.385	.572
35 いきすぎた冗談を言わないようにする	-.133	.195	.179	.406	.258	.463
21 友だちの言うことを否定しないようにする	.178	.071	-.059	.344	.225	.488
(5 自分には興味のない話題をしていてもあいづちをうつようにする)	.158	-.059	.154	.249	.187	除外
説明された分散の合計(回転後)	6.822	3.570	1.483	1.003	—	—

網掛け表示は因子負荷量.3以上のものを示す.
（　）で括られた項目は因子を構成する項目から除外された項目を示す.

因子間相関（上段　探索的因子分析，下段　確認的因子分析）

因子	2	3	4
1	.427	.216	.537
	.549	.405	.664
2		-.098	.245
		.075	.326
3			.441
			.648

位尺度での併存的妥当性も確認された．さらに，この確認的因子分析モデルについて，高校生，大学生の間で多母集団同時分析を行ったところ，高校・大学間でのパス係数を等置制約したモデルの方が，等置制約を課さないモデルよりも AIC, BCC ともに低く，学校段階間で共通する因子構造であることが確認された（等置制約なしモデル AIC=2580.247, BCC=2653.314，等置制約モデルで AIC=2568.546, BCC=2631.523, RMSEA =.051）．

各変数の平均と標準偏差は Table ２の通りである．

Table 2　各変数の平均と標準偏差

	n	平均	標準偏差
傷つけられ回避	459	28.617	6.349
距離確保	458	19.349	5.212
礼儀	457	34.361	4.341
傷つけ回避	459	26.856	4.762
自尊感情	456	24.338	5.819
被受容感	457	19.713	3.413
被拒絶感	458	9.487	2.502
配慮・熟慮	458	22.609	3.220

4.2　モデルの検証

4.2.1　調査対象者の分類

次に，「傷つけ合い回避尺度」の得点に基づいたクラスタ分析を行い調査対象者を分類した．分析は，項目得点の相関係数を基にしたグループ間平均連結法を用いた．その結果，距離係数.035 で 4 クラスタが適切なクラスタ数と考えられた．

各クラスタの特徴を検討するため，傷つけ合い回避尺度の各下位尺度の合成得点の標準得点を求め，各クラスタの平均値を求めた．その結果を，Table 3 に示す．ここに見られるように，第 1 クラスタ（153 名，うち男子 65 名，女子 88 名）は「傷つけられ回避」「距離確保」「傷つけ回避」の標準得点が正の値をとり，このうちでも「距離確保」が他のクラスタよりも高かった．このことから本群は，傷つけられることを恐れ友人との距離をとる群と考えられる．これは，岡田（2011）における「関係回避群」に相当すると考えられる．第 2 クラスタ（92 名，男子 31 名，女子 61 名）は「距離確保」以外の平均値が正の標準得点で，特に「傷つけられ回避」「傷つけ回避」が 4 クラスタ中最大であった．すなわち，傷つけ合わないように気を遣いながら関係を維持する群と考えられる．これは岡田（2011）の「気遣い・群れ関係群」群に相当すると考えられる．第 3 クラスタ（149 名，男子 49 名，女子 100 名）は「礼儀」の平均値のみが正の標準得点であった．すなわち傷つけ合うこと

への恐れを持たずに相手に対する礼儀を遵守しながら関係を維持する群であり，岡田（2011）の「内面関係群」に相当すると考えられる．第 4 クラスタ（57 名，うち男子 19 名，女子 38 名）は「距離確保」の平均値のみが正の値であった．すなわち，傷つけ合うことを気にしないと同時に，礼儀を遵守して関係維持をはかることにも関心が低い，いわば孤高を保ち他者を遠ざける特徴を持つ群と考えられる．各クラスタでの性別ごとの人数比について対数線形分析（ANOVA コーディング）によって分析したが，クラスタ×性別の交互作用においては有意な効果は見られず，各クラスタでの性別による構成比に有意な差はないと考えられた．

Table 3　各クラスタの平均標準得点と標準偏差

		クラスタ			
		1(n=153)	2(n=92)	3(n=149)	4(n=57)
傷つけられ回避	平均	.319	.531	−.357	−.769
	標準偏差	.863	.854	.961	.821
距離確保	平均	.645	−.282	−.684	.475
	標準偏差	.319	.859	.802	.804
礼儀	平均	−.432	.032	.469	−.136
	標準偏差	.645	.920	.828	.881
傷つけ回避	平均	.081	.354	−.239	−.195
	標準偏差	−.432	.958	1.062	.907

各クラスタでの高校, 大学生の人数を Table 4 に示す. この人数比について同様に ANOVA コーディングによる対数線形分析を行ったところ，クラスタ×学校段階の交互作用について有意な効果が見られ，第 3 クラスタは大学生が多く，第 4 クラスタは反対に高校生が多い結果となった（p<.05）．しかしながら，両群とも極端な開きが見られないこと，他のクラスタでは学校段階間での差が見られないことなどから，本研究では，高校，大学生を一括して以後の考察を行う。

4.2.2　モデルの検証とクラスタ間での比較

次に，岡田（2011）と同様に，友人関係において傷つけ合う傾向が，被拒絶感，被受容感を経て自尊感情に至るモデルを構成し，共分散構造分析を行った（Figure 2）（最尤法, FIML による推定を用いた．また投入変数は合成得点を用いた）.

Table 4　各クラスタの学校段階ごとの所属人数と標準化推定値

		クラスタ				計
		1	2	3	4	
高校生	度数	87	48	57	37	229
	%	19.3	10.6	12.6	8.2	50.8
	標準化推定値	.971	−.210	−3.804*	2.204*	1.192
大学生	度数	66	44	92	20	222
	%	14.6	9.8	20.4	4.4	49.2
	標準化推定値	−.971	.210	3.804*	−2.204*	−1.192
計	度数	153	92	149	57	451
	%	33.9	20.4	33.0	12.6	100.0
	標準化推定値	5.035*	−1.189	4.375*	−5.682*	−

その結果，十分な適合度指標が得られた（RMSEA=.083 CFI=.969）３．自分が友人から傷つけられることを恐れ回避することが，友人を傷つけることの回避を促し，それによって相手から拒絶されず受容されていると感じ，結果的に自尊感情が維持されること，一方，傷つけ回避からの直接効果に見られるように，友人から傷つけられるといった当面の葛藤を回避しても，相手が自分を傷つける存在であるという脅威そのものは低減せず，被拒絶感は軽減されないことも再度確認された．このことは，「傷つけ合い回避尺度」の「傷つけられ回避」「傷つけ回避」下位尺度によっても岡田（2011）で得られたモデルが検証しうると言え，本尺度の構成概念妥当性の一部が確認された．さらに「礼儀」「距離確保」を含めたモデルでは適合度が低かったことから，それらの下位尺度から分離された「傷つけられ回避」「傷つけ回避」の下位尺度は，岡田（2011）における尺度よりも，直接的に自尊感情の維持に関わる要因であると考えることができる．

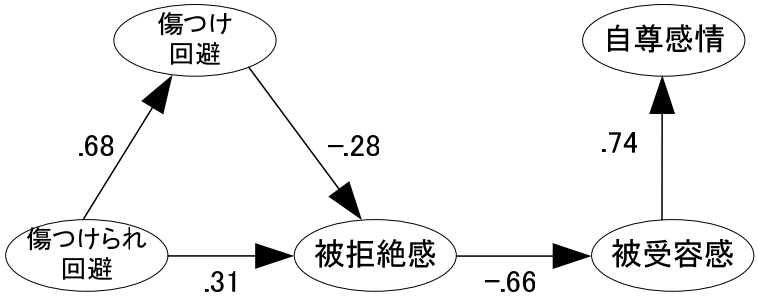


Figure 2　傷つけ合うことの回避から自尊感情へ至るモデル
（値は標準化係数　すべて $p<.01$）

さらに，このモデルについて各クラスタ間での平均構造に関する多母集団同時分析を行った．なお，岡田（2011）と同様，クラスタ分類基準となった変数がモデルに投入されており，観測変数の値がクラスタによって大きく偏っている．よって，変数間のパス係数が

正しく算出されなくなることを避けるためパス係数は各クラスタで等しいとの等置制約を課した.

切片および平均構造について理論上可能な等置制約のパターンを比較した結果，傷つけ回避の切片について第 2 クラスタ＝第 3 クラスタ，被拒絶感および被受容感の切片を第 1 クラスタ＝第 4 クラスタかつ第 2 クラスタ＝第 3 クラスタ，自尊感情の切片を第 1 クラスタ＝第 3 クラスタと制約したモデルで最も適合度が良好であった（AIC=144.017, BCC=149.502）．パス係数，各クラスタでの内生変数の切片，外生変数の平均値および，それらから算出された内生変数の平均値を Table 5 に示す.

ここに見られるように，第 1 クラスタは「被受容感」の平均構造が，他の群よりも相対的に低く，また自尊感情の切片は各群の間で中間的な値でありながら，平均構造の値は 3 群中最低値であった. すなわち友人からの高い被拒絶感と低い被受容感を得て, 結果的に, 自尊感情の維持に失敗している群であると考えられる．これは岡田（2011）における「関係回避群」と共通する特徴であると言えよう.

Table 5　クラスタごとの非標準化パス係数，切片および平均構造

	クラスタ				
	1	2	3	4	非標準化
パス係数		標準化係数			係数
傷つけられ回避→傷つけ回避	.670	.744	.667	..596	0.543
傷つけられ回避→被拒絶感	.332	.271	.356	.267	0.132
傷つけ回避→被拒絶感	-.342	-.251	-.368	-.309	-0.168
被拒絶感→被受容感	-.602	-.693	-.674	-.748	-0.950
被受容感→自尊感情	.851	.732	.714	.644	1.337
切片					
傷つけ回避	0.000	0.680	0.680	2.398**	
被拒絶感	0.000	-0.661**	-0.661**	0.000	
被受容感	0.000	0.924**	0.924**	0.000	
自尊感情	0.000	-1.302*	0.000	1.585*	
平均					
傷つけられ回避(外生変数)	0.000	1.332	-4.270**	-6.878**	
傷つけ回避	0.000	1.403	-1.639	-1.337	
被拒絶感	0.000	-0.721	-0.949	-0.683	
被受容感	0.000	1.609	1.826	0.649	
自尊感情	0.000	0.849	2.441	2.453	

**:p<.01, *:p<.05

注：非標準化パス係数はクラスタ間で等置制約されているためすべてのクラスタで同じ値である．また第 1 クラスタを基準として他のクラスタの切片，平均構造が求められているため，第 1 クラスタの切片，平均構造はすべて 0 となる．内生変数の平均値については，外生変数の平均と非標準化パス係数に基づいて算出された値のため有意性検定は行われていない.

またこの背景には，「傷つけ回避」の低い切片（説明変数の影響を除いた，もともとのその変数の水準）に見られるように，友人を感情的に傷つけることを回避する傾向がもともと低く，また「礼儀」得点の低い平均値にも見られるように，共感的配慮による関係維持にも関心が低いなど関係全般から退却する傾向が見られた．

第 2 クラスタは「傷つけられ回避」「傷つけ回避」の平均構造が 3 群中で最大値を示していた．また自尊感情については，切片は 3 群中で最小値を示しながら，平均構造（説明変数の影響を加味した水準）は第 1 クラスタよりも高かった．すなわち，友人から傷つけられないように防衛的になりながら，友人を傷つけないように気遣うことで，友人から受容されたと感じ，もともと低かった自尊感情を高揚させる，といった一連の過程が顕著に見られる群と言えよう．Gabbard（1994）および狩野（1994）は，自己愛性人格障害を，他者の目を気にして内気で過敏な“hypervigilant（過敏型）”と，周囲を気にせず傲慢でサディスティックな誇大自己を主張する“oblivious（誇大型）”の２つの対極の間に位置づくとし，そのいずれのあり方も，自尊感情を維持するための方略であるとしている．他者の感情を敏感に察知することで自尊感情を維持する本クラスタは「過敏型自己愛」の特徴を持つと言えるだろう．こうした特徴も岡田（2007）の第 3 クラスタや岡田（2011）における「気遣い・群れ関係群」と同様の特徴と言えよう．

第 3 クラスタにおける「傷つけ回避」の平均値は 3 群中で最も低い値であった．この結果は，岡田（2011）において，「内面関係群」における「傷つけることの回避」の平均構造が低水準ではなかったことと異なっている．しかし岡田（2011）における「傷つけることの回避」下位尺度の項目の多くは，本研究で作成された「傷つけ合い回避尺度」では「礼儀」と「傷つけ回避」の２つの因子に分離されていた．さらに第 3 クラスタの「礼儀」の標準得点は 4 クラスタ中最大であった．すなわち本クラスタは，相手に対する共感的配慮は維持しつつ防衛的な抑制は示さない群であると言え，内面的開示を伴う適応的な友人関係を維持する岡田（2011）における「内面関係群」に相当すると考えることができよう．

第 4 クラスタは，「傷つけ回避」の切片は群間で最上位でありながら，その平均構造は低水準であった．すなわち，自分が友人から傷つけられる恐れがない場合には，友人の感情への考慮が低くなる特徴を持つ群と考えられる．また本群は，友人への共感的配慮を示す「礼儀」得点が低く，さらに低い被拒絶感と高い被受容感を示し，自尊感情については切片，平均構造ともに群間で最も高いレベルであった．すなわち，友人に対する対人的配慮をあまり示さなくても相手から受容される感じ，さらに友人からの受容の有無に関わらず自尊感情を維持できるといった特徴が見られる群である．こうした特徴は，自分自身を特

別優れた存在と感じ，一方で他者の感情や欲求には無関心であるとする自己愛性パーソナリティ障害についての記述（American Psychiatric Asscoiation , 2000 高橋・大野・染矢訳 2004）とも類似し，特に Gabbard（1994）や狩野（1994）の述べるところの誇大型自己愛に該当するものと言えるだろう．

ただし，誇大型自己愛者は，高い適応性や精神的健康を示し能動的に目的を遂行するエネルギッシュな人間という肯定的な特徴も併せ持っている（清水・川邊・海塚，2007；清水・川邊・海塚，2008；清水・岡村，2010 など）．また本研究のデータは臨床的なケースではなく一般の青年によるものであることから，本群の特徴が臨床的な問題を生じるようなパーソナリティ障害傾向を意味するものではないことには注意を要する．

4.3 総合考察

本研究では青年の友人関係のうちでも，傷つけ合うことを恐れ回避する傾向について焦点を当て，尺度化を試みた．その結果，一定の信頼性（内的整合性）が得られた．また柴橋（2004）のアサーションの心理的要因尺度との関係から併存的妥当性も確認された．さらに岡田（2011）のモデルと同様の構造が得られたことから，構成概念妥当性も確認された．また岡田（2011）では一つの下位尺度であった，礼儀を守り共感的配慮によって相手を気遣う側面と，友人を感情的に傷つけ気分を害してしまう不安から防衛的に行動を抑制する側面が，それぞれ別の下位尺度（「礼儀」「傷つけ回避」）に分離されたことも，本尺度の有用性を示すものである．

さらに，本尺度を用いたクラスタ分析では，従来から見出されてきた他者の評価を気にしながら自尊感情を維持する過敏型自己愛の特徴を示す群（第 2 クラスタ）の他に，誇大型自己愛の特徴が示唆される群（第 4 クラスタ）が見出された．このことは，現代青年の友人関係のあり方と自己愛の関連について，新たな議論の可能性を開くものであるが，この点については，自己愛傾向との関連などさらなる検討が必要となるだろう．

付記

本研究は科学研究費 基盤研究（C）課題番号 20530589「現代青年の友人関係・自己のありかたと社会適応に関する研究」の補助を受けて実施された研究の一部である．また本研究は「岡田努（2008）．現代青年の友人関係に関する試論―傷つけ合うことを避ける傾向について．日本パーソナリティ心理学会第 17 回大会発表論文集,208-209.」および「岡田努（2009）.現代青年の傷つけ合うことを回避する傾向についての研究．日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集,27.」として発表されたものに加筆修正を施したものである．

注

1 TRUSTIA/R.2 Mining Assistant（ジャストシステム）を用いた.このソフトウェアは，自由記述データを文章ごとに区切り，用語辞書によって要素（単語、品詞、出現頻度）を抽出し，文章や語句の関係性を分析するものである（大野邦夫, 石沢朋, 横田久弥 （2007）.パーソナル・テキストマイニング技術の可能性. 画像電子学会 第 18 回 VMA 研究会）.
2 本調査の分析に当たっては SPSS15,18 および AMOS17,19（いずれもエス・ピー・エス・エス社 現 IBM 社）が用いられた.
3 なお，傷つけ合い回避尺度の他の下位尺度を含んだモデルでは十分な適合度は得られなかった.

引用文献

American Psychiatric Association（2000）.*Diagnostic and statistical manual of mental disorders*.4th edition, Text Revision. Washington, D.C. :American Psychiatric Association.

（アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸（訳）（2004）. DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 新訂版 医学書院）

土井隆義（2004）.「個性」を煽られる子どもたち―親密圏の変容を考える 岩波ブックレット 633 岩波書店

土井隆義（2008）. 友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル 筑摩書房

古市憲寿（2011）. 絶望の国の幸福な若者たち 講談社

Gabbard, G.. O.（1994）. *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV Edition*. Washington D.C.: American Psychiatric Press.

狩野力八郎（1994）.自己愛性人格障害 シリーズ精神科症例集 5 「神経症・人格障害」中山書店 pp.274-285.

栗原彬（1996）. やさしさの存在証明―若者と制度のインターフェイス 増補新版 新曜社

Leary,M., Tambor,E., Terdal,S.,& Downs,D. （1995）. Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of personality and social psychology*, **68**, 518-530.

松井豊（1990）. 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫（編著） 社会化の心理学 ハンドブック―人間形成と社会と文化 川島書店 pp.283-296.

西平直喜（1973）. 青年心理学 塚田毅（編） 現代心理学叢書 7 共立出版

岡田努（2007）. 大学生における友人関係の類型と，適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, **15**, 135-148.

岡田努（2010）. 青年期の友人関係と自己―現代青年の友人認知と自己の発達 世界思想社

岡田努（2011）. 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について.パーソナリティ研究, **20**, 11-20.

Rosenberg,M.（1965）. *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.

佐山蓽子（1985）. 友だちづきあい 東京都生活文化局 大都市青少年の人間関係に関する調査:対人関係の希薄化との関連から見た分析 東京都青少年問題調査報告書, 48-58.

千石保（1985）. 現代若者論―ポストモラトリアムへの摸索 弘文堂

柴橋祐子（2004）．青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究, **52**, 12-23.
清水健司・川邊浩史・海塚敏郎（2007）．青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, **78**, 9-16.
清水健司・川邊浩史・海塚敏郎（2008）．対人恐怖心性－自己愛傾向 2 次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連　パーソナリティ研究, **16**, 350-362.
清水健司・岡村寿代（2010）．対人恐怖心性－自己愛傾向２次元モデルにおける認知特性の検討―対人恐怖と社会恐怖の異同を通して 教育心理学研究, **58**, 23-33.
杉山崇・坂本真士（2006）．抑うつと対人関係要因の研究―被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつ的自己認知過程の検討 健康心理学研究, **19**, 1-10.
山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）．認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

Developing a new friendship scale for adolescents

“not to be hurt by friends” and “not to hurt friends”

Tsutomu OKADA †

† Department of Human Sciences, Kanazawa University, Kakuma, Kanazawa, 920-1192 Japan

E-mail: † tokada@staff.kanazawa-u.ac.jp

Abstract

This study develops the “friendship scale” focusing on adolescents that measures two features: “being careful not to be hurt by their friends” and “being careful not to hurt their friends.” A survey that measured friendship, concern for others/discreteness, sense of acceptance, sense of rejection, and self-esteem was administered to 234 senior high school students and 227 college students. Survey results showed that the 36 items of the friendship scale conformed to a 4-factor structure with high internal consistency. Concurrent validity was indicated by high correlation with the “concern for others/discreteness” scale. A structural equation modeling analysis was employed to test the construct validity. The results suggest that the tendency of “being careful not to be hurt by their friends” inhibited the “sense of rejection” in the subjects through “being careful not to hurt their friends,” and ultimately improved their self-esteem according to the model of Okada （2011）.

Keyword psychology, adolescent, friendship, self-esteem